1　平成 30 年度研究について

（1）研究の内容

ア　研究の目的

〇地域社会と連携協働した教育活動を展開し、教育の目的とするところを共有することをとおして地域社会のなかに、特別支援教育や障害のある児童生徒の能力や可能性について共感的な理解が広がっている。

〇上記の目的を達成するために、授業改善に取り組むことから、多様な児童生徒一人一人に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための力を育むことができている。

〇これらをとおして、共生社会が理念だけではなく実感をともなったものとして広まってきている。

イ　取組内容

＜内容＞

①　障害のある児童生徒の社会貢献について

障害のある人を含む多様な人々の社会貢献の在り方について、視察等により先行事例研究を行う。

②　地域社会と協働した教育活動の在り方について

地域社会における人的・物的な資源と授業をつなぐことから、教育が目的とするところを共有し、教育効果が見込める活動を展開する。

③　社会貢献を実現するための指導の在り方について

能力や可能性を最大限発揮するための指導の在り方について、指導のねらいと評価等に関する実践研究を行う。

④　社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

教育の目的を達成するための教育課程研究を行う。また、学部や社会への移行を想定した学びの連続性を教育課程において可視化する。

⑤　特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

授業改善研究、教育課程研究を中心に取り組む本研究を学校経営と一体化させる。地域社会連携に関する校内分掌を整理する。

＜方法＞

①　年間指導計画の作成と実施

②　授業改善シートの作成と活用

③　地域社会とつながる教育活動の積極的実施

④　年間をとおした全校での授業改善研究の実施と研究協力者による授業評価

⑤　外部評価を得る仕組みづくり

（学校祭における保護者・来校者アンケートの実施、学校評議員の有効活用）

⑥　視察等による全国の先進事例の収集

静岡県立掛川特別支援学校

掛川市中部地域健康医療支援センター「中部ふくしあ」

横浜市立若葉台特別支援学校

広島県立福山北特別支援学校

広島県立庄原特別支援学校

広島県立三原特別支援学校

（２）　研究仮説の検証（平成 30 年度）

研究仮説	検証の結果
新学習指導要領の趣旨を踏まえ、地域社会と連携協働し、社会に貢献する教育活動を積極的に展開し授業改善・教育課程改善を進めることから、特別支援学校が授業をとおして、卒業後に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための力を多様な児童生徒一人一人に育むことができるのではないか。	・新学習指導要領を保護者に配付し懇談等で活用したり、社会に貢献する教育活動を積極的に展開したりすること等から、保護者を含む地域社会と学校教育の目指すところを共有し、連携しながら学校教育の改善・充実を進める好循環を生み出すことにつながった。 ・地域社会と連携協働する授業を積極的に実施し、広報することにより、本校の取組を地域社会に知らせることができ、共生社会の実現に向けてともに考えることにつながった。 ・年間を通じて授業改善・教育課程改善を進めることが、卒業後に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送るための「生きる力」の検討につながり、教科別の指導、領域別の指導、各教科等を合わせた指導の充実に向けた改善を繰り返す好循環を生み出すことができた。

（３）　研究の成果

ア　障害のある児童生徒の社会貢献について

障害のある人を含む多様な人々の社会貢献の在り方について、研究協力者等による講演等に基づいた研究や、視察等による先行事例研究から、具体像を検証することができた。

（ア）　研究協力者　大和大学　落合俊郎教授の講演

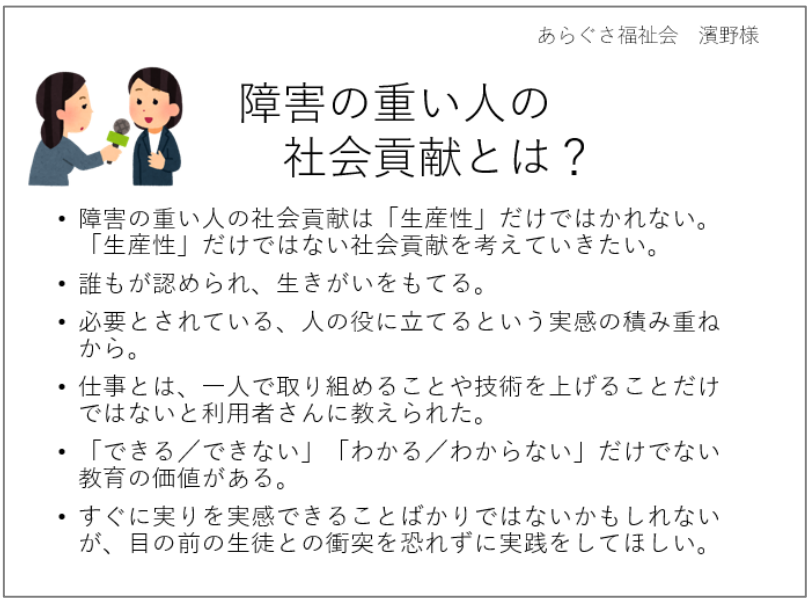
共生社会・共助社会構築にかかわる我が国を取り巻く社会状況を学び、共生社会の実現は理念を共有することや障害のある児童生徒だけの課題に留まらない喫緊の課題であるということを理解した。このことをきっかけに、障害のある児童生徒が生き生きと自分らしく社会貢献する姿を社会全体が求める姿として積極的に捉えることができた。

（イ）　本校の地域にある社会福祉法人あらぐさ福祉会職員　濱野亜希子氏の講演

障害の重い人の社会貢献について、生産性だけでははかれないこと、生産性だけではない社会貢献を考える意義、多様性こそが可能性であること等を学んだ。

重度の障害のある本校卒業生の例では、人に必要とされることや人の役に立てるという実感の積み重ねから、安心して自分の思いを出せるようになり、自分自身の人生を楽しみ、未来を創造し始め、卒業後に地域社会で活躍しているという事例が紹介された。

できる・できない、わかる・わからないだけでない教育の価値を追求するべきだという助言があった。



（ウ）　平成 23 年度に新設された京都府で一番新しい特別支援学校

宇治支援学校　相馬美加教諭の講演

宇治支援学校では、地域において働くこと・生活することを目指す学校として地域社会を学習環境として捉えている。「地域を学習活動に積極的に取り入れた活動を展開し、児童生徒の生活の質を高めることがよりよく生きる力の育成につながる」との考えは本研究の目指すところでもある。地域と協働した学習を進めることが地域社会における障害のある児童生徒の理解を広げることにつながる、そしてそのことが共生社会の形成に貢献するものとの実践例について学んだ。

先行事例研究では、他府県の特別支援学校の実践例から、児童生徒が社会の一員として社会貢献していく可能性を見いだすことができた。

- コミュニティスクール制度の活用による地域協働
- 学校開放の工夫
- 地域行事への参加
- 児童生徒が自分たちの得意なことで社会貢献する例
- 児童生徒がもっている様々な力が町中で求められ、児童生徒が活躍する姿が日常的になっている例　等

先進校視察

- 静岡県立掛川特別支援学校
- 中部ふくしあ（静岡県掛川市）
- 横浜市立若葉台特別支援学校
- 広島県立三原特別支援学校
- 広島県立庄原特別支援学校
- 広島県立福山北特別支援学校

本校では「自分らしく社会貢献すること」を以下の４点の項目で整理した。

①この世に生まれてきて、存在していること
②自分のもっている力を精一杯使って生活すること
③人との関わりやつながりのなかで、何らかの役割を得ること
④共生社会の形成に影響を与えること

今後はこれらの視点を授業づくりにつなげるよう活用していく。

イ　地域社会と連携協働した教育活動の在り方について

地域社会における人的・物的な資源と授業をつなぐことから、教育が目的とするところを共有し、教育効果が見込める活動を展開した。

校務分掌に「地域社会連携部」を位置づけ、部の機能を活用した地域社会と関連づけた授業、地域社会と連携協働した新規行事である「学校祭」を軸とした年間の取組を進めるとともに、直接的に地域展開しなくても普段の授業のなかに共生社会で生きる視点をもった授業が重要であると捉え、実施してきた。

地域社会と連携協働した教育活動の成果は児童生徒の姿の変容に表れた。

小学部の特別活動では、地域の方を講師に迎えた「たけのこ掘り」の授業において、地域の方に教えてもらえる喜びがもっとやりたいという積極的な姿につながった。

中学部の生活単元学習「プレゼントをしよう」で近隣の学校に手作りプレゼントを贈る取組では、相手のことを考えて使いやすいものを作るよう試行錯誤や工夫をするようになった。次は〇〇（自分が卒業した小学校等）へ行きたいという展望が生まれたり、初めて会う人の前で授業の説明を発表できた達成感を感じたりすることができた。

高等部の作業学習（木工）では、近隣で茶道具等の竹工芸の製作販売を行う会社の方に竹箸の製作を指導してもらうことでどんどんスキルが上がっていくことの喜びや、販売への意欲が芽生えた。

「学校祭」は、児童生徒の多様な可能性を発揮する場と捉え、地域社会と連携協働した授業を積極的に発表した。

学校祭における保護者・来校者アンケートより（抜粋）

・学校と直接関係のない人を積極的に招待し学校のことを知ってもらいたい。（保護者）

・地域の学校と一緒にできることは何かを、先生や子どもたちと語り合える場を作りたい。（来校者）

・イベントごとに限らず、様々なことでつながりたい。（来校者）

・地域とのつながりがもてるよう、学校のオープン化を進めてほしい。今晩家族に今日の発表の素晴らしさを伝えたい。（来校者）

今後は地域社会をもう一つの教室と捉え、

①地域を知る・学ぶ取組

②将来の生活の質を高めることにつながる取組

③地域に障害のある児童生徒の理解を広げる取組

を積極的に行いたい。

ウ　社会貢献を実現するための指導の在り方について

児童生徒の能力や可能性を最大限発揮する指導の在り方について、指導のねらいと評価等に関する実践研究を行った。

授業改善シートを作成し、ねらいの明確化と評価について検討した。

一つの単元につき一つの「授業改善シート」を作成し、共生社会で一人一人がよりよく豊かに生きる力を育むために、児童生徒一人一人の目標・指導内容・指導方法・学習評価を明らかにし、授業改善に継続して取り組むことで、単元における児童生徒の到達目標を明確にした。

小学部
生活単元学習
「5組のうどん屋さん」

・見通しや期待感をもって活動に取り組む。

・活動の中で、自分の役割を果たす。

・身近な人と楽しい時間を共有することで、人を意識し、関わり合うことの楽しさを知る。

授業改善の継続した取組に「主体的・対話的で深い学び」のキーワードをより意識することで、育成すべき資質・能力へのアプローチが進んだ。

その結果、小学部では、やりたくなる活動の設定→わかってできる→自信をもってできる→誰かのためにやってみたい→社会性の素地づくり、という好循環を生み出すことができた。

中学部では、前単元と次単元のつながりを明らかにし、生徒が何を学ぶのかがわかる授業、積極的に地域社会と連携協働する授業、教科の視点をもった授業づくりに取り組むことができた。

高等部では、生徒の日々の生活をよりよくする教科別の指導を研究し成果を上げた。

また、年間指導計画の作成と活用により、年間を見通した指導を推進し、授業の単元化、教科・領域別の指導と合わせた指導の関連の検討に取り組んだ。研究協力者による全学級の授業参観と授業評価を実施し、研究協力者による授業評価を以下のように分析した。

中学部
生活単元学習
「役に立とう」

・単元の始めと終わりに頑張ること、頑張ったことを発表する。
・指導者の手本や手順書を確認しながら、制作、依頼、**清掃ができる。**
・清掃活動をとおして他者（職員）の役に立ち、依頼を達成することで感謝され、またやってみよう、やってみたいという気持ちを養う。

高等部
数学
「割り勘について」

・作るものから材料と量を想定し、買うものの合計額を出すことができる。（かけ算、たし算）

・合計額と人数から一人当たりの負担額を出し、余りの処理でどうお金を出していったらよいかがわかる。（わり算）

①児童生徒がわかって動ける授業づくり
（Ｔ１・Ｔ２の役割分担、「主体的・対話的で深い学び」の視点）
②適切な実態把握と目標の設定
（発達や障害の視点、生活年齢の視点、教科をとおして文化を教える視点）
③地域社会のつながり
（社会参加・社会貢献の視点、将来に生きる視点）
④教育課程の改善
（単元のつながり、教科の視点、目標と評価の観点の必要性）

授業改善研究の分析

キーワード
T1T2の役割分担
児童生徒がわかって動ける授業
発達や障害の視点、生活年齢の視点
将来の視点
地域社会とのつながり
教育課程の改善
教科の視点
単元のつながり
主体的、対話的で深い学びの視点
実態把握と目標設定
目標と評価の観点の必要性
文化を学ぶこと

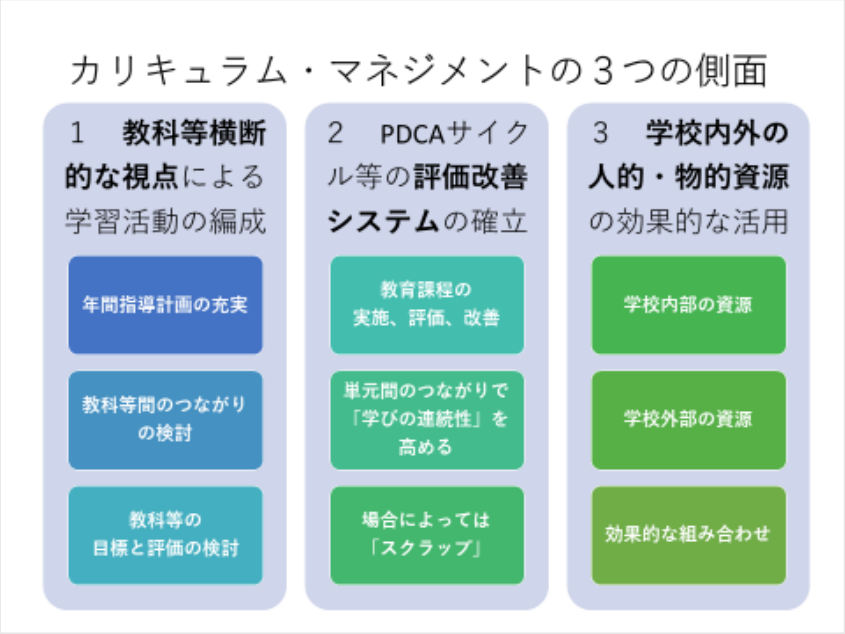
エ　社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

児童生徒の能力や可能性を最大限育成し、社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。また、学部間や社会への移行を想定した学びの連続性の教育課程における可視化に向けた研究を行った。

①教科等横断的な視点による学習活動の編成
（年間指導計画の作成と活用、教科等間のつながりの検討、教科等の目標と評価の検討）

②PDCA サイクル等の評価改善システムの確立
（教育課程の実施・評価・改善、単元間のつながり、学習活動のスクラップアンドビルド）

③学校内外の人的・物的資源の効果的な活用
（学校内部の資源の活用、学校外部の資源の開拓、両方の効果的な組み合わ



年間指導計画の作成は、教科等横断的な視点や、単元間のつながり（学習の積み上げ）を意識することになり、年間を通じた活用につながりやすかった。

また、年間指導計画を活用することは、日々の授業と行事との関係を考えることにもつながった。特に「学校祭」は新学習指導要領の趣旨を生かし、社会に開かれた行事として、地域資源の活用等にも取り組むことができ、地域社会からの理解と期待を感じる機会となった。

令和２年度は高等部学習指導要領の告示も踏まえ、学部間の学びの連続性を意識した教育課程の整理に取り組むこととした。

オ　特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

授業改善研究、教育課程研究を中心にした本研究を、学校経営と一体化させるよう進めた。

①地域社会連携部の設置

（地域社会と協働した教育活動の推進役という部の機能を活用した地域社会と関連づけた授業、地域社会と連携協働した授業の実施）

②行事の見直し（「学校祭」）

（これまで学校内に閉じた行事であった「体育祭」「文化祭」をリニューアルし社会に開かれた行事として企画実施、地域とのネットワークづくり、授業改善をとおして成長した児童生徒の姿の発信、教育の目標とするところを地域社会と共有）

③広報等発信の充実

（自分らしく精一杯力を発揮している児童生徒の姿を地域社会に伝えるためのホームページ・校門前掲示板・コミュニティ放送局の活用）

④学校評議員会議の活用（学校評議員による評価の活用）

本研究と一体化させた学校経営についての評価は以下のとおりである（一部）。

・児童生徒が生き生きと生活する姿を地域社会の人が知ることができるよう発信することが重要である。

・地域社会の人にとっても「自分に何ができるのか（何をすればよいか）がわかると連携協働しやすい。

・学校祭のコンセプトを地域社会との連携協働や、社会貢献にしているところがよい。地域とつながるということが学校にとってとても重要なことである。

（４）　評価計画

評価計画	結果等
（ア）研究協力者（大和大学　落合俊郎教授）による授業見学、指導助言	本校の研究内容、研究計画について評価を受けた。 ・障害のある人も自分なりの力をもって社会貢献することができる。そのためには、教員と保護者の意識改革が必要である。 ・障害があるから働く必要がないとするのは差別であり、社会経済的にもマイナスである。どの子どもも人に貢献したい気持ちがあるので、学校には共生社会を担う児童生徒を育てる使命がある。個人因子より環境因子を重視することで実現する。 ・例えば作業学習での製品作りを「地域社会で販売する」という設定で行うと、モチベーションだけでなく同時にスキルも上がったということがある。同じ学習でも、地域社会を意識する等取り組み方次第で教育効果が上がる。同じことばかりを続けていると価値や成果がわからなくなるため定期的に変えていく必要もある。 ・児童生徒の社会の中での可能性を育てられているか。外部の力も積極的に借りて、本物にすることが重要である。
（イ）研究協力者（立命館大学　青山芳文教授）による授業見学、指導助言	授業改善の観点について助言を受け、全校で改善に取り組んだ。 ①児童生徒がわかって動ける授業づくり （Ｔ１・Ｔ２の役割分担、「主体的・対話的で深い学び」の視点） ②適切な実態把握と目標の設定 （発達や障害の視点、生活年齢の視点、教科の文化を教える視点） ③地域社会のつながり （社会参加・社会貢献の視点、将来の視点） ④教育課程の改善 （単元のつながり、教科の視点、目標と評価の観点の必要性）

（ウ）研究協力者（大和大学　落合俊郎教授）による全校研究会における評価	１・２学期に実施した授業改善研究の取組について助言を受けた。 ・どのような授業をしたかのみに留まり、児童生徒が主体的に何に取り組んだのか、どれだけどう変化したのかが分析できていない。そのためにも個別の指導計画をはじめとする評価システムにより、何がどうなったのかということを検討することが重要である。 ・授業評価は教員自身の評価、保護者の評価、そして児童生徒の評価が重要である。児童生徒の評価を授業改善に生かすべきである。 ・どの授業においても「ユニバーサル化」された工夫（手立て）が必要である。
（エ）研究協力者（立命館大学　青山芳文教授）による全校研究会における評価	授業改善報告についての評価と、今後検討が必要な課題についての助言を受けた。 ・「わかりやすく提示する」ということは、スケジュールを示すことだけではなく、流れの必然性や現実の必然性があるかどうかである。 ・「役割を果たす」ということは幼児期の発達段階の児童生徒が「役割を果たしたい」という願いをもつことであり、本来的な欲求である。 ・社会貢献とは、自分自身で「できた」という自己肯定感をもつことに加えて、人の役に立つことを実感すること、身近な人から評価されたと思えることである。身近でない人から評価されることもさらなるモチベーションになり、確実な力の積み上げになっていく。 ・地域社会の視点 地域との日常的な関わりがあれば、発達の力を一歩上げることができる。 ・多様性は可能性 多様性を可能性として捉えることで、不可能と思っていたことが可能になっていく。 ・カリキュラム・マネジメントでの課題解決 生活に結びつける視点での連続性、系統性、関連性の重要性

（オ）地域住民による評価	（学校祭アンケートより抜粋） ・一人一人の参加できた喜びが表情に出ていた。 ・一人ずつ発表するシーンで「自分が主役」という意識が見られ、一人一人の頑張りに声援が送られていたのにも感動した。 ・発表内容が児童生徒に合わせて考えられている。 ・夢中になる姿は共感を覚えた。 ・発表している子も見ている子も一体となって楽しんでいる様子がとにかく感動的 ・みな生き生きと頑張っていた。元気をもらえた。 ・先生も生徒もみんな笑顔で挨拶しており子ども達が毎日をとてもよい雰囲気で過ごしていると感じた。この雰囲気を周りの方にも知ってほしい。 ・地域の学校と一緒にできることは何かを、先生や子どもたちと語り合える場を作りたい。 ・地域の方とも交流がもてるので続けてほしい。 ・イベントごとに限らず、様々なことでつながりたい。 ・積極的に声をかけてくれて嬉しかった。 ・今後とも地域社会に貢献されますように。 ・地域との交流は難しい課題だと思うが引き続き頑張ってほしい。 ・学校で色々な勉強や体験をとおして自立していきいきと生きてほしい。
（カ）保護者による評価	（学校祭アンケートより抜粋） ・授業で練習していた成果が出ていた。 ・卒業してからもどんなことでも取り組める、頑張れる力をつけられたらと思う。 ・近隣の皆さん、地域の皆さんが支援学校や障害のある人たちのことを偏見なく温かく見守っていただけるような取組をこの先も学校、保護者で考えて行けたら良い。 ・自分たちで考えて取り組むという試みはとてもよかった。 ・家では考えられないようなことができていることにすごく感動をおぼえる。

（５）　平成 30 年度研究の課題と、研究２年目の方策

研究の成果で述べたとおり

ア　障害のある児童生徒の社会貢献について

イ　地域社会と連携協働した教育活動の在り方について

ウ　社会貢献を実現するための指導の在り方について

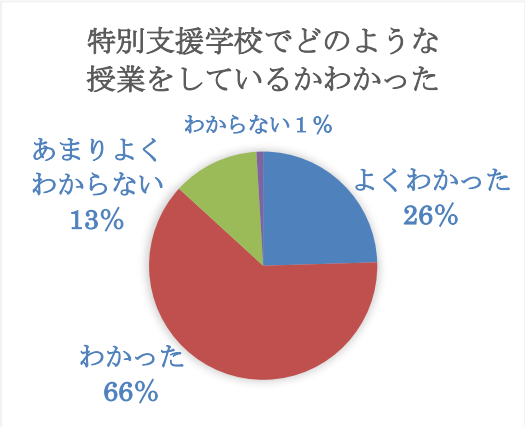
エ　社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

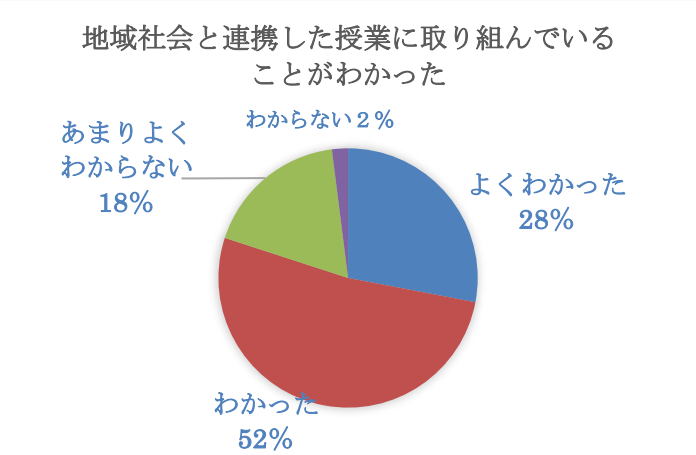
オ　特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

の５点に取り組むことで、授業や教育課程のなかに地域社会との連携、社会貢献の視点が含まれるようになった。地域社会と連携協働した教育活動を展開し、教育の目的とするところを共有することをとおして地域社会のなかに、特別支援教育や障害のある児童生徒の能力や可能性について共感的な理解が少しずつ広がってきた。

しかし、学校祭アンケートのなかにある「特別支援学校でどのような授業をしているかがわかった」の質問には、14%が「あまりよくわからない」「わからない」と答えており、また「地域社会と連携した授業に取り組んでいることがわかった」の質問には、20%が「あまりよくわからない」「わからない」と　答えている。

（回答者内訳　保護者38%、福祉関係者26%、地域住民20%、その他16%）。





今後さらに、「児童生徒が卒業後に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための生きる力をつける」という本校が目指すところを地域社会と共有したり、継続的に連携協働したりすることにより、場を共有するだけに留まらない児童生徒の成長を近くで見守り、喜びをともにする地域社会のさらなる広がりをつくっていきたいと考える。

研究２年目に取り組む課題と今後の方策について、以下の２点でまとめた。

①高等部学習指導要領の告示も踏まえ、学部間の学びの連続性を意識した教育課程の整理の課題（小、中、高、地域社会へ学びの連続性の課題）

・生活年齢等に応じて異なる社会貢献する姿の検討
・学びを計画的に積み上げるための年間指導計画のさらなる充実
・新学習指導要領の研修によるその趣旨を生かしたさらなる授業の工夫
・地域住民による授業評価の実施
・学校公開等における評価アンケートの実施

②生きる力につながる教科の視点と、教科等横断的な視点についての課題

・学びを計画的に積み上げるための年間指導計画のさらなる充実
・新学習指導要領の研修によるその趣旨を生かしたさらなる授業の工夫
・学校公開等における評価アンケートの実施
・各教科等を合わせた指導の単元化
・同時期に行う他の授業との関連づけ
・教科の観点からの指導のねらいの具体化
・エビデンスのある評価に向けた改善
・児童生徒による授業評価の実施
・「教科・領域等関連表」の作成と活用